札幌 おもひで劇場

街並みや暮らしの変遷とともに大きな発展を遂げた昭和の札幌。その一場面に居合わせた方に、思い出の旅へと案内してもらいましょう。

第六回 占領期のジャズ音楽

今回のご案内役は……江河徳雄（えがわのりお）さん

本場の演奏との差を痛感し 必死に技術を磨いた日々

北海道のジャズの歴史は、真駒内のキャンプから始まった。戦後いち早く米軍視察団が来道し、進駐軍受け入れを担当していた「終戦連絡事務局」と共同で、真駒内に兵舎と膨大な娯楽施設を建設。市内の大型ビルやホテル、デパートは接収され、米軍施設が配置された。いずれも「日本人は立ち入り禁止」と表示されたのは言うまでもなかった。

間もなく、真駒内キャンプと各米軍専用クラブにおける慰問演奏の要請が「特別調達庁」に対してなされ、プロ、アマ七つほどのバンドが結成された。米軍専用ダンスホールも設立され、「ゴールデンゲート」（南四西三、現ニュー北星ビル）、「いく代ダンスホール」（南三西四、現ＪＲＡ）、「ダンスパレス」（南一西一、現丸井今井駐車場）では、二つのバンドが演奏した。

施設で演奏するには、特別調達庁指定のオーディションを受け、資格を取得する必要があった。合格すると、技術別に七ランクに分けられて、初めて演奏が可能なのである。また、演奏のたびに各クラブ支配人のサインと演奏技術評価（四ランク）をもらった。

楽譜は米軍から入手したが、難しいコード（和音）など理解できない部分も多く、ずいぶん戸惑ったものだ。そのため、ＦＥＮ（米軍家族向け放送）を聴いたり、グレンミラー主演の音楽映画「銀嶺（れい）セレナーデ」が公開されると何度も映画館に足を運んで曲を覚えたりと、技術向上に努めた。

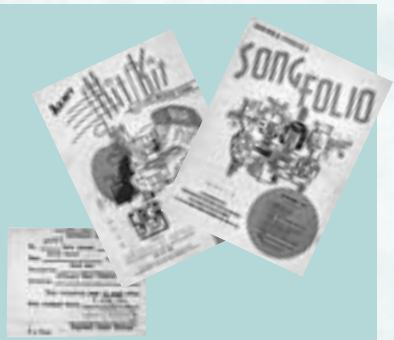
米軍クラブで印象に残っているのが豊富な飲食品だ。コーヒーなどは飲み放題であった。モノが乏しい戦後の札幌にあって、そこはまさに別空間。米兵からはリクエストも多く、「センチメンタルジャーニー」「ハーバーライト」など、懐かしい曲がクラブの喧（けん）騒とともに思い起こされる。

オクラホマの第四十五師団が進駐したときのこと、その軍楽隊の演奏を聴いてその即興能力に驚嘆した。到底われわれの技術と比較にならないと痛感したものだ。

間もなく、朝鮮動乱（戦争）が勃発。米軍撤退後、クラブにいたバンドマンはススキノに結集し、キャバレーやクラブ、音楽喫茶が続々と開店して、ジャズブームを引き起こした。

当時のある米軍将校いわく、「日本のジャズはアメリカより七十年遅れている」。半世紀が過ぎた今も日本のジャズ演奏家たちは、たゆまぬ努力でこのギャップを埋めようとしている。音楽もずいぶん変ぼうし、電気楽器による演奏が主流になった。私としては、〝あの時〟の演奏で受けた衝撃を胸に、いつまでもアコースティック※な音楽を楽しみたい。

北５西６付近にあった「NCOクラブ」での演奏風景。中央が江河さん。右端の男性は米兵で歌手とマネジャーを務めていたドン・リンゼーさん。互いの宿舎を訪問するほど親しくしていたという



左は、真駒内のキャンプクロフォードへの通行許可証。右は、アメリカ本土から毎月送られていた軍専用の楽譜集

◆えがわ　のりお
小樽生まれ。ジャズギター、ピアノ奏者。戦後本市の米軍施設で演奏。その後、本市、東京などで活躍。現在は、日本音楽家ユニオンＪＰＣ委員、音楽講師。ピアノ奏者の弟・徹郎さん経営のピアノサロンに出演中。豊平区在住。

※アコースティック＝生の音での演奏